

ミャンマー（ミャンマー連邦共和国）

ミャンマーの旧称ビルマはサンスクリット語で「清浄な人」の意味を持つ。長年イギリスの植民地であったが、1943年に「ビルマ建国の父」として知られるアウン サン氏指導の下でビルマ国を建国。1945年にイギリス領に戻るなどの混乱が続いたが、1948年ビルマ連邦として独立した。後に軍部が政権を握り独裁政治が長く続いた。これに対して、「建国の父」の長女、アウン サン スーチー女史を指導者とする民主化運動が起こるが、自宅軟禁などの弾圧が続き、ノーベル平和賞の授賞式にも出席できなかった。しかし、2015年の総選挙で彼女が率いる国民民主連盟が圧勝した。1989年にミャンマー連邦に改名、2005年には首都を「王都」の意味のネピドーに変えた。

人口は5450.0万人（2024）、その60%がビルマ民族で主に平地に住み、カレン族、モン族やシャン族など多数の少数民族は周辺山地にそれぞれの州を形成している典型的な多民族国家である。その背後にビルマ人の激しい独立運動を抑えるために内部抗争をさせるためにイギリスが仕組んだ結果ともいわれている。

仏教徒が国民の80%を占め、生活に深く浸透し、熱心な仏教国で知られている。主要農産物は米で、農地の60%を水田が占めている。人口の70%が農業に従事し、エイヤーワディ川デルタは大米作地帯となっている。他に宝石の産出が多く、中でもルビーの大半を産している。1990年代までは米が代表的な輸出品だったが、近年は天然ガスやチーク材が中心となっている。国土面積の約50%はほとんどが手つかずの森林地帯で、世界三大銘木の一つであるチーク材^(*)が多く存在し、ミャンマーチークとして世界的に知られている。

(*) チーク材 マホガニーと並び高級材で様々な用途に用いられる銘木である。材質は強く強靱で耐久性があり、病害虫にも強く、美しい木目ことから高級材として知られている。高級列車として知られるオリエント急行や豪華客船クイーンエリザベス2号の内装に用いられている

<ミャンマーの小乗仏教>

イギリス植民地当時は避暑地で、第二次世界大戦では日本軍の前進基地にもなったカローから、山谷を越えて1日かかりで来た僧院に一夜の宿をお願いした。あどけない少年僧、凛々しい青年僧から痩せた老僧まで18人が仏と共に寝起きしていた。ここに来る途中、午前中高台に建つ尼寺で一休みした。持参した昼食を食べたのは山間の小さな集落の僧院だった。午後の休憩も松風の爽やかな僧院だった。各僧院には、申し合わせたように道路に面した庭先に、飲み水を満たした素焼きの壺があった。また、茶漉しを兼ねた糸瓜を栓にしたポットがあり、中国茶の緑茶で満たされ、果物や菓子までも用意されていた。



カローホテル（戦時中日本軍が利用）

聞くとところによると、水を供養することは寺院を建立することや木陰を宿す大樹を植えて育てることと並ぶ最高の功德の一つとされているとか。そして、飲み水の便宜をはかった人は「冷たい水の施主、イエチャングダー」と呼ばれて後々まで敬意を受けるとも聞いた。寺院の水は喉の渇いたも

の誰しもが平等に飲める慈悲の水だ。そして僧院もまた地域と行き交う人々と日常的に結びついていた。



バカンにて



ボランティアでタベの清掃（ヤンゴン）

ミャンマーには 80 万人の坊さんがいると記された本を見た。国民の約 2 % である。ミャンマーの僧侶のうち、完全に出家した本職の僧侶は 10 万で、残りは一時的に僧院に入って仏に使用している人々だという。そして、今でも男の子は 20 歳までに得度、剃髪して仏門に入る式、シンピューを行い、仏教の教理や世界観を学び、僧侶としての生活様式を身に付けるのだという。

小乗仏教では悟りを開くためには教典を学び、瞑想などの修行や戒律を守ることが最も大切とされ、出家して厳しい修行に身を投じた僧侶は人々の尊敬を集めている。彼らが守るべき戒律は全部で 227 もあると聞いた。従って、「仏教」は在家信者に戻ってからも行動様式の背景をなしており、僧院と世俗の生活とは連続しており、同じ基板上にあることになる。しかも、人によっては若い時に 2 度 3 度と得度式をやる人、退職後に仏の教えに身をゆだねる人と様々だというから、僧侶になる習慣は今日でも頑なに守られている。ミャンマーは正しく「仏の国」であった。



祈る

<バカンの遺跡群>

マルコ ポーロがバガンを訪れたのは、ビルマ民族による最初の王朝、バガン王朝（1044～1287）の華やかなりし頃であった。美しさのあまり絶句したバガンの様子を「東方見聞録」に書き記している。バガンの遺跡群は、エーヤーワディー（イラワジ）川東側にひろがっていた。王朝最盛期には 5,000 を越すパゴダや寺院が建立されたという。今日でも 3,000 が確認され、2,000 以上の建造物が残っている。コブ牛が鋤を引く赤土の畑、作物の緑滴る畑、その間に散らばる巨大な寺院やパゴダ、崩れて大地に帰りつつあるパゴダなどの遺跡群が地平線の彼方まで広がっていた。遺跡群を縫うように舗装道路、砂利道それに農道が走り、車が、馬車が、牛がそして人間が通っていた。バガンは住む人々の日常生活から隔離され、魂の抜き取られた遺跡ではなかった。1,000 年

近くの時を越えて、今なお美しく息づいていた。なお、カンボジアのアンコール ワットとインドネシアのボロブドールと共に世界三大仏教遺跡に数えられている。

金色に輝く仏像が収められているアーナンダ寺院は、装飾、壁画などから仏教芸術の円熟期を代表するバカン随一の大寺院である。ティーローミンロー寺院は、人々の仏教への深い信仰、繁栄への願い、ヒンズー教の影響、当時の暮らしぶりなどがうかがい知ることができる。

いくら石やレンガ造りでも建造物である以上、朽ち果てる運命にある。それが今日でも見る人の心を捉え、感動させる光景を保ち続けているのは、バガン王朝は勿論、王朝滅亡後も「損傷してはならぬ、あるがままに残しておけ」、さらには手厚く保全に、時には修復に努めてきた結果と息を吐きたい。そして、その根底には仏教がミャンマー人の宗教として、熱狂的に支持され続けてきた証でもある。



＜バカンにて＞

仏教はそもそも現世からの離脱を説く教えであるが、究極の目標は苦痛や欲望のない、存在自体が消滅した境地の「涅槃」に到達することだという。この涅槃への道を実践的に展開しているのが上座部仏教だという。自分が時折仏と向き合ったときのことを思うとあまりにも大きな隔たりである。

熱烈な仏教徒のミャンマーの人々にとって日常生活の目標は、先の涅槃へ一歩でも近づくこと、輪廻転生を繰り返す自分の存在が少しでもより良い状態への再生であると聞いた。再生は現世での良い行い「功德」と、仏教徒として相応しくない行い「悪徳」の差し引きによって決まるのだという。功德の具体的な行為としては、① パゴダの建立 ② 得度式の主宰 ③ 僧院の建立 ④ 僧院へ井戸または鐘の寄進 ⑤ 食事の寄進 ⑥ 僧侶への布施 ⑦ 俗人へのものやサービスの提供などである。そして、これらの功德は、行為の報酬として仏陀から与えられるものではなく、行為自体に内在しているという考え方である。行為自体に価値があるので、相手が気付かなくとも、どのように受け止めようとも問題はないのだという。

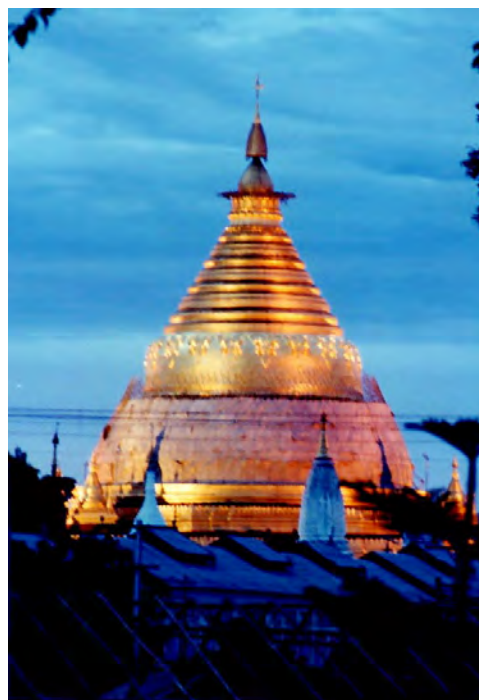
白亜の本堂と黄金の尖塔をもち、バガンで最も美しく尊敬を集めているアーナンダ寺院（1091年バガン王朝第3代チャンジェダ王による建立）を訪れたときである。カメラ持込料の小銭が無く係の女性に迷惑をかけてしまった。それが縁であれこれ言葉を交わし、カメラにも収まってもらった。お互いに言葉に不自由しながらも楽しい語らいの一時だった。帰り際、「家で、夕食をご馳走したい」の言葉に、二つ返事で約束をしてしまった。彼女は今日友人に替わって寺院に来たが、本来は漆器造りをしているという。手当ては1日6～70円だと言っていたことを思い出し、心に迷いが

出てきた。半信半疑で宿の前で待っていると、約束の 19 時に電灯をもって迎えにきてくれた。大通りから暗闇の小路に入り 2、3 度曲がったところが自宅だった。親父さんが胡坐姿で見守るなか大勢の子どもたちが外で遊んでいた。皆兄弟だという。

通されたところは、土間に石を置いた炉と畳 3 枚分くらいの板の間だった。円テーブルには魚のカレーはじめ、煮物など六品ほど並んでいた。少し気が重くなってきた。徳を積んだ坊さんならまだしも、戒律至上主義の上座部仏教国では自分の日常は生臭生活そのものである。相手に功德を積む機会を与えているなどと到底考えられなかった。そして、遊びまわる子供たちは腹一杯食べたのだろうかと思うと、胃袋が急に小さくなるのが解った。食後の語らいのなかで明日の夕食も、の申し出があたったが、明日は西のシャン州に向け出発するのでと辞退した。

帰り際、明るい大通りまでと 5、6 歳の男の子と足元を照らしてくれた。途中、シュエジューゴオンパゴダがライトアップされ暗闇に浮かび上がっていた。歩みを止め、旅の安全をと手を合わせてくれた。何の気負いもない一連の所作に鼻の奥がツンとしてしまった。明るいところまでの見送りを断り、一人ゆっくりとホテルに戻った。一介の旅人に対してのこの利他的行動を思うとなかなか寝付かれなかった。

空港職員に切手代金を添えてお願いした葉書が日本に届いた。タクシー代をべらぼうにふっかけられることもなかった。夜道の一人歩きも不安がなかった。「ビルマは平和な国です。弱くまずしいけれども、ここにあるのは、花と、音楽と、あきらめと、日光と、仏像と微笑みと……」(竹山道雄『ビルマの琴』)。今日もこのままの優しさの溢れる国、ミャンマーだった。



シュエジューゴオン パゴダ

<チャイティーヨー パゴダ> - ゴールデン ロック

ミャンマー中東部、1,100m のチャイティーヨー山は、電車とバスを乗り継いだ後、鯨詰め状態のトラックの荷台で 50 分、さらに山道を歩いて 40 分だった。傾いた岩棚に高さ 7m ほどの巨岩がのり、その上に仏塔が建っていた。仏教徒が多数を占めるミャンマーでは仏教聖地の一つである。岩棚が谷側に向かって少し傾いているうえ、浅く腰掛けるように乗っているから巨岩が不安定に見える。巨岩の下をのぞく。岩棚と接する部分は少なく端は浮いており反対側が見えた。物理の法則を無視したような不安定な状態を保っているのは、仏塔に収められているブッダの遺髪がバランスをとっているからと信じられている。男性たちは参拝しながら新たに金箔を貼り、お祈りをしていた。女性は少し離れて祈りを捧げている。巨岩近くは女人禁制だった。

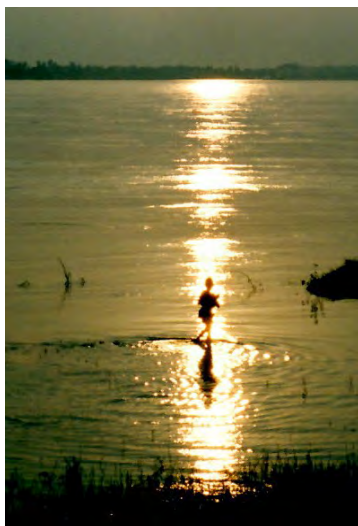
アンバランスの妙に見とれている時だった。突然、大地の底から響くような読経が流れてきた。釈迦が天国から降りてきた記念日の行事の始まりだった。200 名を超す僧侶の頭を後ろから見ると

うごめく木魚のようでもあり異様な光景だった。その背後に、ボランティアで手伝いに来た女子高校生の一団が腰を下ろしていた。音と香りと人々の様子から、より一層神々しさが漂っていた。



ラオス（ラオス人民民主共和国）

ラオスは「ラオ族の国」を意味する。ラーンサーン王国として統一されたこの国は、フランスによる統治や内戦を経て、1975年に「ラオス人民民主共和国」として誕生した。「ベトナムの弟」、「タイとは親戚」と称される関係加えて、メコン川水利を狙う中国の援助に頼っている。人口は777.0万人（2024）、国土の80%は高原や山岳地帯で、国民の78%が農業に従事する。国内総生産は低いが、食料に困ることはなく、「貧しい国の豊かさ」とも言われている。



黄金に輝くメコン川

東南アジアを旅しているとミャンマー並んでラオス勧める旅人が多い。「凄いものはないが、すごく良いところ」だという。確かにゆっくりと流れる時間、のんびりと暮らす人々を見ていると、日本人がどこかに置き忘れた、懐かしい何かが残っており、心から癒される不思議な魅力をもつ国であった。

山国の農業国ラオスは、沖積平野の広がるタイやベトナムと同じよう経済発展を期待することは難しい。しかし、近年、山国の地の利を生かしてインドシナ半島の地域を支えている水力発電が主要産業の一つになっている。国内の電力消費量の4倍も発電し、インドシナ全体に電力を供給し「インドシナ半島のバッテリー」と呼ばれるまでになっている。

国を挙げて1999年から2000年にかけてラオス観光年として観光産業育成に努力してきた。1997年ルアンパバンの街などが世界遺産に登録され、観光産業が急速に発達した。その結果、ニューヨークタイムズの「世界で一番行きたい国」1位に選ばれた。

<老僧>

首都ビエンチャンの北約 400 km、1975 年の革命で王制が廃止されるまで王都として 600 余年間栄えたルアン パバーンがある。「大きな黄金の仏像」の地名だけに街のあちこちに立派な寺院があり、街全体が世界遺産の指定を受けている。

やっと明るくなってきた朝の 5 時過ぎ、街のあちこちで蒸した糯米を竹の入れ物に入れた住民たちが、道路わきで履き物を脱ぎ、地面に膝まずいている。通りの向こうから、ひたひたと素足の僧侶の列が近づいてくる。恭しく供物を差し出す。無表情、無言で地元の人たちから施しをうける僧侶たち。この托鉢からルアン パバーンの 1 日が始まる。500 年以上も前から繰り返されてきた当たり前の光景だという。

托鉢の様子を思い出しながらゆっくりと朝食をとった。先ほど托鉢を終えた僧侶の列が吸い込まれて行ったゲストハウス前の寺院に向かった。石段の先に僧院があった。食事を終えた僧侶たちが動き回っていたが、僧院を覆う森の空気には精気が漂っていた。静かな環境に合わせるようにゆっくり歩きながら戻ろうとした時だった。僧院の反対側の建物から落ち着いた口調で呼び止められた。エンジ色の袈裟の老僧の姿があった。「どちらから？」に続き、ゆっくりとながらも途切れることなく話し合いが続いた。そして、「茶をどうぞ」となり、自室に招き入れてくれた。質素な部屋で



あったが、「百八煩惱」まみれの身にはどこか落ち着かなかったが、精神的な奥深さと静けさの貴重なひと時を過ごすことができた。窓から見送ってくれた姿にゆっくりと頭を下げ、僧院を後にした。

<ラオスの布>

ラオスの一日は、夜明けとともに始まり、メコン川に沈む夕日を見送って終わる。ラオスは 90 年代まで鎖国状態だった。そのことが影響して山岳地帯に住む民族の間に布の手工芸技術が引き継がれている貴重な国となっている。

国民の中心民族ラオ族の民族衣装は「シン」と呼ばれる巻きスカートと、「パービアン」という肩掛けの組み合わせである。これが天然染色の手織りの絹布で出来ている。その美しさは、風土



と暮らしの中から生み出されたものだ。絵柄は人々の生活の様子、精霊や宗教儀式など生活そのものである。

子供の頃、父親に作ってもらう織り機は、女の子のおもちゃであり、自然と染織の技術を見様見真似で身につけ、習い、学び、熟練させていく。ラオスの布は日常生活の中に溶け込んで、長い年月の中で育まれてきたものだ。共同作業場での機織りも見せてもらったが、多くは家々の軒先高床式の床下など置かれた手織り機で日々の日課の一つとして続けられてきたものだ。

原料の綿花はその土地の風土を記憶し、綿布は紡ぐ人の手の温もりを感じ、布には織る人の生活も織り込まれ、その土地の風土と共に生活から生み出されたものだった。また、布売り場で商品を見ていても無理に宣伝し、売りつけることはない。気に入ったら買ってと笑顔で話しかけてくるだけである。市場にもゆっくりとした感が流れ、のんびりと暮らす人々の生活の場もあった。

＜ラオスの旅＞

ベトナムで会した独り旅の方々の一押しの国がラオスだった。時間の流れがたまらなかったという。タイからメコン川越しに眺めた深々と木々に覆われたラオスに思い焦がれてきた。

タイの国境の街、ノンカイから陸路でビエンチャンに入った。バスターミナルから中心街への足、タクシーもトゥクトゥクも「乗らないかい?」といった感じだった。運賃交渉でも笑みが絶えなかった。動き出したタクシーは、車窓からの景色を楽しんでくれと言わんばかりの速さだった。

首府ビエンチャンの1日の始まりは鶏の鳴き声であり、昼食後に午睡をし、夕陽がメコンの川面に光の橋を架ける頃になると川岸に人の波ができる。そして、陽が沈み、微かに茜色を残す空を背にして裸電球の灯る街へと帰っていく。

植民地、内戦、解放政策、経済成長などなど世の中の移り変わりと共にラオスの人々の暮らしも変化したと思う。しかし、悠久の大河が時には急流に変化しても、時の経過と共に元の流れに戻るように、心安らぐ人間本来の生活リズムであり続けることを語りかけているように思えた。

ラオスの旅は急ぐとか、予定通りとか、効率を優先する所ではない。可能な限り優柔不断に、その場の雰囲気流され、道草の多い旅が似合う国、ラオスであることを認識した。

ラオスの旅が終わりに近づいた時、宿をねぐらにしている旅行業者にバンコック行の航空券の相談をした。「ここは社会主義の国で、外国人は国民の約3倍近い二重価格だから、一旦タイに出てから飛行機を利用した方が安い」と教えてくれた。

カンボジア（カンボジア王国）

カンボジアは、「クメール民族の太祖カンブーの子たち」を意味する。フランス保護領からフランス領インドシナを経て1953年カンボジア王国として独立する。しかし、ベトナム戦争契機に、アメリカと中国が後ろ盾となり激しい内戦が始まる。ベトナム戦争からアメリカが撤退すると内戦に勝利したクメール ルージュが社会主義国家カンプチャを建国し、1976年、ポル・ポトが首相に就任すると思想改造の名の下で虐殺が行われた。その対象となったのは資本家、富裕層、教師、医者、公務員、芸術家、宗教関係者などなど「考えることができる人」で、政権に反対する可能性が

あるということで容赦なく強制収容所に送られた。その数 200 万人から 300 万人とも言われ国民の 1/3 以上が命を奪われた。再び内戦が始まり泥沼化するが、冷戦終結をきっかけに 1991 年にようやく内戦が終結し、1933 年、今のカンボジア王国が誕生した。

人口は 1763.9 万人（2024）で、民族構成はクメール族が 86%を占め、他にベトナム族や中国人がそれぞれ 5%、その他は少数民族になっている。人口の 90%以上が小乗仏教徒である。2011 年のアジア開発銀行によると、1 日 2\$ 未満で暮らす貧困層が国民の半数を超えている。国土の 30%が農地として利用されており、その大半が水田で、人口の 34%が農業に従事する農業国である。カンボジアを訪れる観光客が増加の一途をたどっており、2015 年は前年度比 6.1%増で貴重な外貨獲得となっている。その中心は国旗に描かれている世界遺産のアンコール ワットとアンコール トムである。

<トゥール スレン博物館>

退職した夏、プノンペンに新設されたトゥマイ職業訓練センターへ植林ボランティアで行った。ボランティア活動終了後、ベトナムを旅し再びカンボジアに戻った。その時、足を運んだのがトゥール スレン博物館だった。外観は何の変哲もない学校風の建物だった。しかし、博物館に一歩足を踏み入れた途端、動けなくなった。1975 年から 4 年間に及んだポルポト政権の残虐行為を象徴する場所だ。元々は高校校舎だったところを刑務所にし、多くの人々が拷問のすえ処刑された。ベトナム軍がプノンペンを解放したとき、殺害された遺体がベッドに縛り付けられたまま放置されていた写真があった。ポルポト派が撮影した処刑を待つ人々の写真が壁を埋め尽くし、拷問に使用した器具、処刑後の写真も展示されていた。教室の一部はレンガで区切られた独房もあった。社会主義改革強行に伴う残虐行為を目の当たりにして気持ちが滅入ってしまった。そして、頭蓋骨で形作られたカンボジアの地図から漂う微かな匂いと、薄暗い室内での骨の色に完全に言葉を失い、体が動けなくなった。

中庭ベンチに倒れこんだ時、目の前に子供を吊るし、打ち付けて虐殺した木が立っていた。良く手入れされた芝生広場にはブーゲンビリアが奇麗に咲いていた。建物の裏手の空き地から笑い声と話し声が響いてきた。夕焼けのやわらかい光を受けてバレーボールに興じる若者たちの姿があった。でも、「何で彼らは死ななければならなかったのか?」と、そればかりが頭の中を駆け巡っていた。

<アンコール ワット>

カンボジアの中央部に湖と河川が一体となったトンレサップ湖がある。その河川はメコン川支流で、水運と漁業と農業を支えている。湖の北にクメール王朝の遺跡、世界的に有名なアンコール ワットやアンコール トムといった世界遺産のアンコール



遺跡群がある。これらは9世紀から 600 年間に渡り東南アジアに君臨したアンコール王朝によって築かれた巨大な石造建築物である。19 世紀中頃、フランス人によって発見されるまで密林の奥深くに眠り続けていた。地元の人々も知らなかったというのは不自然な感があるが、「密林の中に眠り続けた」遺跡を彷彿させる風景

を求めてプノンバケンに出かけた。ここから見る限り、見渡す限りの密林の中にぽつんと浮かぶ城であった。

「寺院のある都市」の意味のアンコール ワットは南北 800m、東西 1,000mの石の堀に囲まれ、その外側は幅 190mの大きな堀が取り巻いていた。内乱時、ポルポト軍が立てこもり政府軍と交戦した。その痕跡が遺跡の柱や壁に弾痕として残っていた。ここは三大仏教遺跡のひとつに数えられているが、もともとはヴィシュヌ神を祀るヒンズー教寺院だった。12 世紀末のジャヤヴァルマン 7 世が仏教を厚く信仰するようになり、小乗仏教が定着すると仏教寺院となった。いうなればカンボジア版神仏習合寺院である。

寺院の壁面には多くの女神や天女が彫り込まれていた。みんな上半身は裸で、腰には足が透けて見えるほどの薄い布をまとっていた。ひょっとすると、当時の住民も同じような姿で日常生活を送っていたのだろうか。アンコール ワットの構造は、ヒンズー教的宇宙観を表しているという。アンコール ワットの中央祠堂は神々が住む世界の中心のメール山、須弥山で、周りの 3つの回廊は山脈を表し、外側の堀はそれらを囲む宇宙の海をあらわしているという。アンコール ワットはカンボジア版ヒンズー教の神々の世界を表現したものであった。



＜アンコール トム と バンテアイ スレイ＞

アンコール ワットからトゥクトゥクで 20 分、アンコール トムの中心であるバイヨンに着く。アンコール ワットと比較すると、こちらのレリーフは庶民や貴族の暮らしが描かれたものが多い。アンコール トムの建設する時、平和と安定をもたらすために「仏陀による救済」を意図した大乘仏教が取り入れられた。門も含めて寺院のいたるところにある石組みの仏塔の四面には、観世音菩薩の巨大な顔が刻み込まれている。その総数は 196 面に及ぶという。バイ



ヨンのどこからも菩薩の温かい眼差しが感じられる造りで、どこか落ち着いた雰囲気の遺跡であった。



アンコール トムの後、再びトゥクトゥクでバンテアイ スレイ遺跡に向かった。紅色砂岩を使用したレリーフが美しく、太陽の光があたると赤く燃えているように見える遺跡である。バンテアイは砦、スレイは女、「女の砦」である。967 年から建造し始めたヒンズー教寺院である。規模は小さいが、保存状態が良く、入り口から精巧で、立体的で美しい彫刻に目を奪われた。細かすぎる！目を細めて見ないとわからないレベルであった。

バンテアイ スレイをより一層有名にしているのが、「東洋のモナリザ像」と呼ばれるデバター、女神である。門をくぐって中央祠堂に歩いて行くと 2 体のデバターが迎えてくれた。

ベトナム（ベトナム社会主義共和国）

ベトナムは、中国南部に居住していた南方系民族、「越の南」を意味する。フランス保護領、フランス領連邦を経て、第二次世界大戦後にベトナム民主共和国として独立宣言。しかし、インドシナ戦争によって北緯 17 度で国土が二分される。1962 年から 13 年間にわたるベトナム戦争を経て 1976 年ベトナム社会主義共和国となった。人口は 10098.8 万人（2024）、その 90% がキン族ベトナム人で、残り 53 の少数民族である。宗教は日本と同じ大乘仏教が大半を占めている。労働人口の 66% が第一次産業従事しているが、近年は第二次、三次産業が急成長している。特に、観光業が著しく、重要な外貨獲得源になっている。国土はインドシナ半島の太平洋岸に沿って南北に伸びるアンナン山脈の東側に S 字状に伸びている。その北端にはホン川の、南端にはメコン川の大規模な三角州が広がり、人口の 70% が集中し、重要な穀倉地帯になっている。カシューナッツと黒コショウの生産は世界の 1/3 を占め世界 1 位、コーヒーはブラジルに次いで世界 2 位である。

<アオザイ>

ベトナム中央部、かつて南北ベトナムのボーダー近くだったフエで、通学時の女子高生の波に飲まれた。小路から出てきて大通りを埋めつくしたアオザイ姿の列は、まさにモンシロチョウの乱舞だった。また、フエ・ホテルの中庭を歩いてきた芸大の学生は逆光に浮かぶ大輪の白バラだった。ある本にアオザイは「身体の全てを隠しているが、一方で身体の全てを見せている」とあった。アオザイ姿を前にして実感できた。生地がひらひらする脚の部分は見えにくい、逆光となれば別である。このことを着ている本人が知らない、気づいていないということはないはずである。それなら、そ

れとなく見てもよいのではないか。ところが、答えは「ノー」だという。見せているのではなく、見えてしまうのだから、見て見ぬ振りをするのがマナーだという。

ホテルの方は小柄でジーンズ姿だった。自分は似合わないから着ないという。そして、アオザイ体形を語ってくれた。①背筋がすっきり伸びていること ②ウエストが細く、高いこと ③なで肩であること 色のことをたずねたら、高校生の白は「純粋・清純」、ベトナム航空のキャビンアテンダントのピンクは「若々しさ」、地上勤務の青は「希望」、黄色は「支配」で赤は「戦勝」、紫は「貞操堅固」だという。



＜国民食 フォー＞

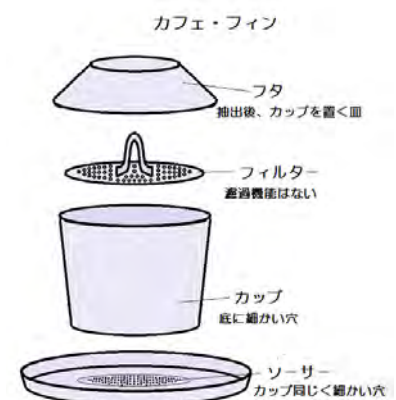
ベトナムにはいろいろな麺がある。ミイといわれる小麦粉麺、ミエンと呼ばれる豆やイモ類のでんぷんから作る春雨、一番人気の米粉で作られた「フォー」と「ブン」などなどである。ベトナムの国民食ともいえるフォーとブンだが、原料は同じ米粉だが、作り方に違いがある。フォーはうるち米を細かな粉に挽き水で溶き、それを布の上で大きな四角形に蒸しあげてから麺状に切った蒸し平麺。一方ブンは小さな穴を開けた容器に米粉を溶かした液を入れ、トコロテン式に押し出しながら熱い湯の中に落としてつくる丸麺。ハノイの人たちは、朝食としてフォー ガー、鶏肉のフォーを食べる。フォーのスープは薄めの味で、好みに唐辛子やライム、その他の香草などを入れて自分流にアレンジしていた。麺の外に常食にしているのは、飯、粥、フランスパンなどであった。また、コーヒー生産が世界第2位で、独自のコーヒー文化が根付いていた。



＜コーヒー＞

ベトナムと言えば、メコンデルタでの米作農業国のイメージが濃い。ところが、ベトナム戦争で米輸入国となった。政府は 1986 年に経済の自由化を促進する「ドイモイ（刷新）」政策を打ち出した。経済活動の国家統制を緩和、撤廃していく制度改革である。これによって鉱工業と共に農業生産も急速に向上し、米の生産も輸出量でも世界有数となった。なかでも注目されるのはコーヒーの生産である。

ベトナムコーヒーの生産量は、2011 年頃から急増しブラジルに次ぎ世界2位となり、両国で世界の半分を生産するまでになった。輸出量も世界2位で今日ではコーヒー王国である。その裏には先のドイモイ政策、強力な政府支援と生産技術の向上があったし、中央高原地帯が肥沃な土壌と降水量に恵まれ、安定した温暖な気候が、コーヒー栽培に理想の条件が揃っていた。加えて、フランスとの関係でコーヒー文化が根付いていたことも大きい。ベトナムコーヒーは、深めに煎



った豆を、カフェ フィンという独自の金属フィルターで抽出しコンデンスミルクを加えた濃厚な味が特徴である。近年は甘くて濃厚なアイスコーヒー、カフェ スアダーやエッグコーヒー、コーヒーに卵黄と練乳を混ぜて飲むなどベトナム独自の飲み方が世界で話題になっている。

<沈香>

カンボジアでの植樹ボランティアを終え、独り旅が始まった。ホーチミン、旧サイゴンに入った。目的という程ではないが、ホーチミンからハノイまでの鉄道に乗って見たかった。中間地点のベトナム最後の王朝グエン朝の都フエ観光と、ベトナム戦争の爪痕を見ておきたかった。ハノイでは家にホームスティーしている高校生の様子を親御さんへの報告であった。

フエまでの寝台列車の切符購入を済ませ、お土産屋に入った。清涼感のある香りが漂っていた。店主は日本人だった。香りは沈香だという。香に特別関心がある訳ではないが、イエメンの首都サヌアのスークは埃、商品、人間の匂いが混じり合った複雑な匂いが満ちていた。そんな中で清涼感のある乳香の香りに包まれた一角があった。薄い茶、黄色の直径5mmほどの樹脂の塊が熱せられタール状になったものから香りが流れていた。これがシバ王国に莫大な富をもたらした乳香の原料を初めて見た。



ベトナムは、白檀、伽羅と並ぶ香木、沈香を産する。沈香ができるまでは50～60年とかなりの長期間を、高品質となると100年を越すという。当然、高価になるので、樹木に化学合成物質を注射器で沁み込ませた偽物が出回っているという。

ハノイから戻った2週間後にお土産屋に足を運んだ。店主は、観光客の「後でまた来る」は大体信じられないと笑っていた。話が弾み、太さ1～1.5cm、長さ15cmほどの香木を一束買い求めた。そして、これから戻るカンボジアプノンペンでの宿を紹介してくれた。日本に戻り、知合いの書家に4～5本お土産としてお渡しした。これをお師匠さんお裾分けしたら、「何処で手に入れた？」と尋ねられたという。